

オック語における複合地名の形容詞化

多賀 吉隆

1 はじめに

この論文で扱うのは、オック語 (Occitan) において、名詞と形容詞からなる複合地名に対応する形容詞が、どのようなものであるかである。その分析を通して、複合語や名詞句が単語の中に入れられるばあいには、どのように処理されるのかを考えたい。

1.1 何を問題にするのか

派生の入力になるものは、通常、単語の部分である語基である。それに接辞が加えられる。住民呼称 (demonym) で考えてみよう。例えば、Tokyo に接尾辞 *-ite* を加えることで、Tokyoite が得られる。英語において Tokyo は内部構造をもたない単純な語根であろう。それでは、複雑な構造をもつ地名ではどうなるだろうか。

例えば、New York から New Yorker が得られる。音韻的には [[*ω*New] [*ω*Yorker]] のように発音しているが、意味的には [[New York] -er] のような構造のはずである。つまり、意味と音で構造が一致しない。このようなばあい、形態的にはどういう構造になっていると考えればいいのかであろうか。

もし、New と Yorker の2語からなるのであれば、後半要素が英語の単語にない Baton Rougean のようなばあいもそうなのであろうか。1語の複合語であるならば、*néw-còmèr* のような強勢パターンではなく、*Nèw Yórker* のような強勢パターンのままなのは、なぜなのだろうか。

さて、オック語を含むロマンス語では、地名に対応する形容詞を名詞として使うと住民呼称 (仏 *gentilé*) になる。また、それは、言語 (方言) をも表す。フランス語で例を示そう。L'Occitanie ‘オキシタニー’ に対応する形容詞

occitan が、同形で un occitan ‘オキシタニー人’、l’ occitan ‘オック語’ になる。この例では、形容詞から地名が派生されているが、逆に地名から形容詞が派生する方が多い。例えば、France ‘フランス’ の形容詞 français ‘フランスの’ が作られている。やはり同形で un français ‘フランス人’、le français ‘フランス語’ になる。

オック語では、語順が比較的自由であり、名詞・形容詞の性・数による屈折が明示的である方言もある。このような特徴を利用して、複合地名に対応する形容詞の構造を分析したい。

以下では、第 1.2 項で分析に必要なオック語の特徴を説明する。第 2 節では複合地名に対応する形容詞を分類・記述をする。それをもとに第 3 節では議論をする。

1.2 オック語の特徴

1.2.1 オキシタニストの書記法と強勢の位置

この論文では、歴史主義的なオキシタニストの書記法を使う¹⁾。この表記法では、強勢規則を次のようにまとめられる。

(1) オック語の強勢規則

- a. 接語 (clitic) 以外には強勢がある。
- b. 原則として、〈s〉を除く最後の子音群に直接先行する二重母音か単母音にある。
- c. 例外には、主母音字にアクセント記号を付ける。
- d. 強勢がある /ɛ, ɔ/ には 〈è, ò〉と鈍アクセント記号を付ける。

なお、〈é, è〉 (/e, ɛ/) 〈ó, ò〉 (/u, ɔ/) の 2 組の対立は、強勢位置以外にはなく、他の位置では 〈e〉 (/e/)、〈o〉 (/u/) と中立化される。

複合語では、1 語として間に空白やハイフンを入れずに表記されるものが多い。そのばあいでも前半要素・後半要素、両方に強勢がある。例えば、aigamarina ‘アクアマリン’ は後半要素の形容詞 marina ‘海の’ の 〈i〉 だけでなく、前半要素の aiga ‘水’ の 〈ai〉 にも強勢がある。

1.2.2 曲用

オック語のラングドック方言は、名詞と形容詞が文法性と数で屈折する。また、形容詞は修飾する名詞に文法性と数で一致する。性・数の指標は、名

詞と形容詞で共通し、原則として下の表のようにになっている(例えば、Salvat (1978) など)。

(2) オック語の曲用 (mont ‘山’、montanha ‘山’、bèl ‘美しい’、negre ‘黒い’)

	男性	女性
単数	Ø, -e mont, bèl, negre	-a montanha, bèla, negra
複数	-s, -e-s monts, bèls, negres	-a-s montanhas, bèlas, negras

男性形はラテン語の第二曲用、女性形は第一曲用に由来する。第三曲用の語尾は音変化の結果、第二曲用の語尾と同形になっている。古語においては、ラテン語の第3曲用に由来する通性の形容詞があった。しかし、第一曲用からの類推により、新たに女性形が作られている。例えば、fòrt ‘強い’では、una influéncia fòrta ‘強い影響’である。ただし、地名などの複合語では通性の形で残っているものがある。例えば、女性名詞の ròca ‘岩’を修飾するが Ròcafòrt ‘基礎自治体 40304’である²⁾。

語基の形はむしろ女性形から -a を除いたものである。最後の子音が無声化したり、半母音化したりすることがある³⁾。例えば、男性形の nòu ‘新しい’に対して、女性形の nòva であるが、novèl ‘新品の’である。

1. 2. 3 語順

現代語の語順は、原則として主要部が修飾や項に先行する右枝分かれ (right-branching) である。そのため、名詞・形容詞、名詞・形容詞句の語順になることが多い。また、名詞・前置詞句の語順は義務的である。

- (3) a. un-a família pauc-a
a-F family pauc-F
‘貧しい家庭’
- b. un-a femna fòrça bèl-a
a-F woman much beautiful-F
‘とても美しい女性’
- c. la-s femna-s de la comuna
the.F-PL women-PL of the.F municipality
‘町の女性たち’

形容詞が名詞に先行するばあいに特別な意味が生じるものがある。また、いくつかの形容詞では、単独で使われるばあい、先行しやすいものがある。

- (4) a. un-a paur-a familha
 a-F poor-F family
 ‘かわいそうな家庭’
 b. un-a bèl-a femna
 a-F beautiful-F woman
 ‘美しい女性’

地名においては、形容詞と名詞の語順を入れかえたものがあるばあいもある。例えば、clar ‘明るい’ と mont ‘山’ から、Clarmont ‘基礎自治体 63113’ と Montclar ‘基礎自治体 11242’ が作られている。

2 分類

資料として主に用いたのは、Ubaud (2011) と Mistral (1932) の2つの辞書である。前者は、標準方言に近い働きをする「参照オック語 occitan referencial」のものであり、ラングドック方言にもとづく。後者は、主にプロヴァンス方言によるが、他の方言の形も豊富に載せている。また、オック語版やカタルーニャ語版の Wikipedia から用例を集めている。これらの資料からできるかぎりラングドック方言の地名とそれに対応する形容詞・方言名・住民呼称を探した。

以下では、主要部が何であるかで分けて紹介する。第2.1項で主要部が地名であるもの、第2.2項で一般名詞であるもの、第2.3項で人名であるものを扱う。

2.1 主要部が地名であるもの

全体が地名であるだけでなく、主要部も地名であるものを扱う。形容詞が nòu ‘新しい’ については、例が少ないが特殊であるので、まずこれを示し、次に他のものを示す。

2.1.1 形容詞が nòu であるもの

このばあい、形容詞が前置されている。また、指示する場所は nòu ‘新しい’

を省いたものとは異なっている。例えば、Nòva Anglatèrra ‘ニューイングランド’ はアメリカ合衆国の一部であるが、Anglatèrra ‘イングランド’ は連合王国の一部である。地名としては、Nòu Mexic ‘ニューメキシコ’ のような男性名詞、Nòva Jersey ‘ニュージャージー’ のような女性名詞の両方がある。今回、集めた範囲では、形容詞が確認できたのは、いずれも女性形である。

- (5) a. Nòv-a Yòrk ~ nòv-a-york-és
 new-F York new-F-York-ADJ
 ‘ニューヨーク’
- b. la Nòv-a Zelanda ~ neo-zeland-és
 the.F new-F Zeeland new-Zeeland-ADJ
 ‘ニュージーランド’
- c. la Nòv-a Caledònia ~ caledoni-an
 the.F new-F Caledonia Caledonia-ADJ
 ‘ニューカレドニア’

nòvayorkés では前半要素がそのまま強勢も残っているが、neozelandés では前半要素が新古典複合語 (neo-classical compound) で使われるギリシア語由来の語根 neo- に置き換えられ、前半の強勢も失われている。caledonian では前半要素がなくなるが、維持される neocaledonian もある。caledonian は本来、Escòcia ‘スコットランド’ に相当する地域のラテン語名に由来する Caledònia の形容詞である。これに対して、zelandés は Zelanda ‘ゼーラント(オランダ)’ の形容詞である。

なお、文法性の偏りは、偶然であろう。Nòu Mexic に対応するカタルーニャ語の Nou Mèxic には形容詞 neomexicà がある。これに対応するオック語の形は *neomexican になるはずであるが、用例は確認できない。

2. 1. 2 その他の形容詞によるもの

主要部となる地名としては広域なものである。形容詞は naut ‘高い’、bas ‘低い’ が多い。

- (6) a. lo Carcin Bas ~ bas-carcin-òl
 the.M Quercy low low-Quercy-ADJ
 ‘低地ケルシー地方’

- b. la Provença Bass-a ~ bas-porvenç-al
 the.F Provence low-F low-Provence-ADJ
 ‘低地プロヴァンス地方’
- c. lo-s Naut-s Alps ~ naut-alp-enc
 the.M-PL high-PL Alps high-Alps-ADJ
 ‘オート・アルプ県’

もとの語順によらず、形容詞が文法性・数の屈折語尾を失ない前置される。主要部が形容詞化されるが、これは単独に形容詞化されるときと同じ形である。このことは、対応する形容詞が派生語尾をもたないばあいでも同様である。

- (7) a. la Bass-a Alemanha ~ bas-alemand
 the.F low-F Germany low-German
 ‘低地ドイツ’
- b. lo Naut Lemosin ~ naut-lemosin
 the.M high Limousin.N high-Limousin.ADJ
 ‘高地リムーザン地方’

ただし、表現から意味を予測できないばあいには、異なるものがある。

- (8) a. la Naut-a Vòlta ~ volta-ïc
 the.F high-F Volta (river) Volta-ADJ
 ‘オートボルタ(現・ブルキナファソ)’
- b. la Grand Bretanha ~ britanic
 the.F big Brittany British
 ‘グレートブリテン’
- c. la Bretanha ~ breton
 the.F Brittany Breton
 ‘ブルターニュ’

ここで、オートボルタはボルタ川の上流域であり、上流部ではない。また、グレートブリテン島は、ブルターニュ半島の大きなものではない。

2.2 主要部が一般名詞のもの

形容詞は後置されるものが多い。形容詞が前置されるばあいも、後置されるばあいも語順は保たれる。下の例では mont ‘山’ が名詞である。

- (9) a. Clar-mont ~ clar-mont-és
 clear-mount clear-mount-ADJ
 ‘仏 Clermont-Ferrand 基礎自治体 63113’
- b. Mont-redond ~ mont-redond-èt
 mount-round mount-round-ADJ
 ‘仏 Montredon 基礎自治体 46207’

主要部が地名である第2.1項のばあいとは異なり、nòu ‘新しい’ は後置される。主要部が男性であるばあい、形容詞の男性形から基底の形に変わる。主要部が男性であるばあいも同様に形容詞の女性形から屈折が除かれ、基底の形に変わる。

- (10) a. Castèl-nòu ~ castèl-nov-enc
 castle-new castle-new-ADJ
 ‘仏 Castelnau-d’Aude 基礎自治体 11077’
- b. Vila-nòv-a ~ vila-nov-enc
 city-new-F city-new-ADJ
 ‘仏 Villeneuve-Minervois 基礎自治体 11433’

前半要素の主要部が複数形であるものは、後半要素の複数の指標も消える。しかし、前半要素の複数マーカーは消えない。

- (11) a. Aiga-s Mòrt-a-s ~ aiga-s-mort-enc
 water-PL dead-F-PL water-PL-dead-ADJ
 ‘仏 Aigues-Mortes’ 基礎自治体 30003’
- b. Aiga-s Viv-a-s ~ aiga-s-viv-òl
 water-PL live-F-PL water-PL-live-ADJ
 ‘仏 Aigues-Vives 基礎自治体 11001’

Aigas Mòrtas はプロヴァンス方言の地域なので、複数の〈s〉が発音されな

い。Mistral(1932)では*Aigo-Morto*, *aigourten* のようになっている。しかし、*Aigas Vivas* は複数の〈s〉が発音されるラングドック方言の地域にある。実際、地名のラングドック方言形が*Aigos-Bibos* であり、住民が*aigos-vivols* である。なお、ラングドック方言では〈b, v〉に発音の区別はない。

形容詞化の接尾辞は、主要部によっても、形容詞によっても確定しない。

- (12) a. *Vilanòva* ~ *vilanovenc* [= (10)b]
 b. *Vila-franc-a* ~ *vila-franqu-ièr*
 city-free-F city-free-ADJ
 ‘仏 Villefranche-de-Lauragais 基礎自治体 31582’
 c. *Vila-franc-a* ~ *vila-franc-òl*
 city-free-F city-free-ADJ
 ‘仏 Villefranche-d’Albigeois 基礎自治体 81317’

主要部である前半要素の強勢は、派生されても保たれる。

- (13) a. *lo País Bas* ~ *país-bass-òl*
 the.M country low country-low-ADJ
 ‘低地ラングドック地方’
 b. *Pèira-pertus-a* ~ *pèira-pertus-és*
 stone-pierced-F stone-pierced-ADJ
 ‘仏 Peyrepertuse (オード県にある古城)’

一方、修飾部である後半要素の強勢は、派生語尾に移る。

- (14) a. *Vilanòva* ~ *vilanovenc* [= (10)b]
 b. *Ròca-fòrt* ~ *ròca-fort-és*
 rock-strong rock-strong-ADJ
 ‘仏 Roquefort-sur-Soulzon 基礎自治体 12203’

なお、全く異なる形容詞が使われるものもある。

- (15) lo-s Paiss-es Bass-es ~ neerland-és
 the.M-F country-PL low-PL Netherlands-ADJ
 ‘オランダ’

2.3 主要部が人名のもの

主要部が人名のものは、聖人の名前であり、捧げられた教会に由来する。そのため、修飾する形容詞は前置して聖人を表す *sant* ‘聖なる’ のみである。同名のものが多いためにさらに *de* ‘of’ で導かれる前置詞句を付けて区別することが多い。

男性のものは、*sant* を付けたまま派生されるものと、*sant* を除いて派生されるものがある。

- (16) a. *Sant Africa de la-s Montanha-s* ~ *sant-afric-an*
saint Africa of the.F-PL mountain-PL saint-Africa-ADJ
 ‘仏 Saint-Affrique-les-Montagnes 基礎自治体 81235’
 b. *Sant Jaume de Compostèla* ~ *sant-jaum-et*
saint James of Compostela saint-James-ADJ
 ‘サンティアゴ・デ・コンポステーラ (スペイン)’
 c. *Sant Tropetz* ~ *tropes-enc*
saint Tropes ∅ Tropes-ADJ
 ‘仏 Saint-Tropez 基礎自治体 83119’

女性の地名も多いが、形容詞が確認できなかった。女性複数のもものは、プロヴァンス方言であったが、略称に由来する。

- (17) *lei Sant-ei Maria-s de la Mar* ~ *lei Sant-a-s* ~ *sant-enc*
the.PL saint-PL Mary-PL of the.F see the.PL saint-F-PL saint-ADJ
 ‘仏 les Saintes-Maries-de-la-Mer 基礎自治体 13096’

3 議論

前節では、複合地名と形容詞の対応について説明した。異なる語源をもつ形を使う補充 (suppletion) にあたるものや、新古典語複合語の形を部分的に使うものもあったが、以下では、2つのタイプに絞って議論したい。上は第2.1

項で説明した地名を主要部とするものに多いもの、下はその他の項で説明した、人名・一般名詞を主要部とするものに多いものである。

- (18) a. lo Carcin Bas ~ bas-carcinòl [= (6)a]
 b. lo País Bas ~ paísbassòl [= (13)a]

以下では仮に上を「構成型」、下を「語彙型」と呼ぶことにする。まず構成型を扱い、次に語彙型を扱う。

3.1 構成型はどういう複合語なのか

この型の形容詞の特徴を確認しよう。

- (19) a. 名詞の意味は、それぞれの部分から構成的である。
 b. 名詞での語順にかかわらず、修飾部・主要部の順番になる。
 c. 前半要素は、修飾部から屈折語尾が除かれている。
 d. 後半要素は、主要部と対応する形容詞と同形である。

この型の地名と形容詞の対応関係は、他のロマンス語、例えばフランス語で la Basse Bretagne ~ bas-breton、や英語でも Lower Saxony ~ Low Saxon のようにみられる。

地名に対応する形容詞は、形容詞・形容詞型の複合語であり、さらに後半要素を主要部とする内心的 (endocentric) である。しかし、前半要素の後半要素へ限定は Giegerich (2009: 191) などがいう細分的 (subjective) である。つまり、bas-carcinòl ‘低地ケルシー地方の’ であれば、確かに carcinòl ‘ケルシー地方の’ ではあるが、それ自体は bas ‘低い’ ことはない。

このような細分的な限定は、truck driver といった合成的 synthetic 複合語にもみられる。Ackema and Neeleman (2010) は、統語論と形態論の競合のために現れない *to [truck drive] のような複合語を仮定している。同様に *bas-Carcin のように表面に現れない複合語を考えられるだろうか。

2つの理由から考えにくい。1つ目は、la Bassa Alemanha から bas-alemand のように後半要素が名詞から形容詞の派生と考えられないものがあるからである。

2つ目は、bas-provençal では la Provença Bassa と競合する *bas-Provença を考えることになる。しかし、多賀 (2013) でみたいようにオック語において

は名詞・形容詞の順のままの複合語があり、名詞を形容詞が抱合しているばあい以外では性が一致している。

そうすると、名詞句である地名と複合語である形容詞の関係をどう考えればいいのであろうか。統語論での名詞句形成と並行する操作が形態論でなされたと考えたい。

まず、いろいろな言語の複合語で、意味が密接に関係しているばあいであっても、派生関係にないものがある。例えば、オランダ語において‘科学史’は *wetenschapsgeschiedenis* であるが、‘科学史家’は *wetenschapshistoricus* である。‘歴史’ *geschiedenis* と ‘歴史家’ *historicus* から並行して作られたと考えられる。

次に形態論の中でと考えるのは、要素の順序による。オック語の句は上で述べたように原則として主要部が前置される右枝分かれ構造であるが、単語の中では幻想主要部が後置される左枝分かれ構造になっている。例えば、*nautparlaire* ‘スピーカー’は意味としては、[[*naut* ‘高く’ + *parl-* ‘話す’] + *-aire* ‘動作主’]、発音としては、[*naut* + [*parl-aire*]] のような構造である。屈折を付加することに統語論が関与していることを考えると、屈折要素がないことも説明できる。

他の可能性としては、前置されているものが副詞であるかもしれない。しかし、*naut* や *bas* の副詞としての用例は動詞を後ろから修飾するものが多く、形容詞を修飾するものはみつけれなかった。また、意味も物理的な高低よりも比喩的なものがほとんどである。

これらの理由から、形態論内部での操作による複合形容詞であると考えられる。このときに名詞句の構造についての情報が使われている。

3.2 語彙型はどういう複合語なのか

この型の形容詞の特徴を確認しよう。

- (20) a. 名詞の意味は、語彙で決められている。
- b. 名詞での語順と、形容詞での順番は同じである。
- c. 前半要素は、主要部でも修飾部でも屈折語尾が保たれている。
- d. 後半要素は、主要部でも修飾部でも屈折語尾は除かれ、派生語尾が付加されている。

この型の地名では、*lo País Bas* ‘低地ラングドック地方’のように句のものと、*Vilanòva* ‘基礎自治体 11433’のように複合語のものがある。しかし、対

応する形容詞は *païsbassòl*, *vilanovenc* のようにともに複合形容詞のようにみえる。そして、構成型とは異なり、必ず派生語尾がある。後半要素に派生語尾を加えたものは、多くのばあい、単独では辞書に記載がない形である。

ここで問題にしたいのは、複合地名の内部構造がなくなるか、いなかである。Botha (1984) は語彙主義の立場から複合語の内部に句が含まれないと主張している。しかし、少なくとも外見上は、句が含まれるものがある。この型の地名が基礎自治体に使われるばあい、同名なものが多いために、区別のために *de 'of'* で導かれる前置詞句が付けられることがあり、それをも含んで派生されるものがある。なお、下の例で *Arri* はバスク語の *harri* ‘石’ に由来する。

- (21) a. *Castèl-nòu d'Aude* ~ *castèl-nov-enc*
castle-new of-Aude [river] *castle-new-ADJ*
 ‘仏 Castelnau-d'Aude 基礎自治体 11077’
- b. *Castèl-nòu d'Arri* ~ *castèl-nòu-d-arri-enc*
castle-new of-Arri *castle-new-of-Arri-ADJ*
 ‘仏 Castelnaudary 基礎自治体 11076’

派生のもとになっているものが、内部構造がない音の連続と考えることもできるかもしれない。そのばあい、省略されるものが統語的に意味のあるものであることが逆に問題になる。さらに、この型には *lo País Bas* ~ *païsbassòl* ‘低地ラングドック地方’ のように定冠詞をもち句として扱われているものも含まれている。

屈折語尾についても考えよう。この型では、*Aigas Vivas* ~ *aigasvivòl* ‘基礎自治体 11001’ のように後半要素の屈折語尾が性も数も除かれて、派生している。内部構造があるにしても、[[*Aigas-Viv*]-as] のように異分析をしているのであろうか。

ここで着目したいのは、*Estats-Units* ‘(アメリカ) 合衆国’ の形容詞形、オック語の *estatsunidenc* とカタルーニャ語の *estatunidenc* の違いである⁴⁾。なお、これは州からなる他の連邦国家を意味しない。

- (22) a. *Estat-s Unit-s* ~ *estat-s-unid-enc*
State-PL United-PL *state-PL-united-ADJ*
 ‘合衆国の’ (オック語)

- b. Estat-s Unit-s ~ estat-unid-enc
 State-PL United-PL state-united-ADJ
 ‘合衆国の’ (カタルーニャ語)

オック語ラングドック方言では前半要素の estat ‘州’ の複数形の指標が残されるが、カタルーニャ語ではこれが除かれる。この例の比較から、派生のばあいに前半要素の屈折について除くか除かないかのパラメタがあることが推測される。そうであれば、派生の過程において統語論的な構造や情報が参照されることになる。

派生の過程で統語論の情報にアクセスができるのであれば、異分析を考えなくとも後半要素から屈折が除かれることも説明が可能である。例えば、次のような仮説が考えられる。屈折語尾・派生語尾の連なりを禁止する上位の制約を考え、屈折語尾の忠実性制約より派生語尾の忠実性制約が高いと考えれば、説明は可能である。しかし、この仮説については派生一般についての議論が必要であり、ここでは提案に留めざるをえない。

4 結論

オック語の名詞・形容詞からなる複合地名においては、その地名の意味が構成的であるもの、例えば la Provença Bassa (‘プロヴァンス + 低い’ → ‘低地プロヴァンス地方’)、に対応する形容詞では、主要部の名詞に対応する形容詞に修飾部の形容詞の原形が前置され付加される (例: bas-provençal)。他方、その地名の意味が語彙的に指定されなければならないもの、例えば Clarmont (‘明るい + 山’ → ‘基礎自治体 63113’)、Aigas Vivas (‘水 [複数] + 生きた’ → ‘基礎自治体 11001’) に対応する形容詞では、語順が維持され、前半要素から屈折がなくならず、後半要素から屈折を除き派生される (例: clarmontés, aigas-vivòl)。複合地名が句であれば、複合語であれば、対応する形容詞は複合語になっている。これら 2 種類の形容詞複合語の構造から、意味が構成的なものでは間接的に、意味が語彙的なものでは直接的に、語形成において名詞の統語的構造の情報が使われていると主張した。

複合語の研究において、その構造を前言語 protolanguage のなごりとする論者 (Jackendof (2002) など) もいるが、今回の研究や多賀 (2012) でみたように、複合語の語形成に統語論が関与していると考えざるをえないものがあり、賛成はできない。

また、地名の意味が構成的なものでは、ほぼ同じ現象が英語や他のロマンス語でも観察できる。しかし、意味が語彙的なものでは、ロマンス語の中でも部分的に異なる。近縁の言語でもデータを集めて検討したい。

注

- 1) 詳しくは、Lafont (1983) を参照されたい。これに加えて、表音主義的なフェリブリージュの書記法がある。
- 2) フランスの基礎自治体(市町村)については区別のために、フランス国立統計経済研究所 L'Institut National de la Statistique et des Études Économiques が管理する5桁の番号を加える。なお、最初の2桁が県を示している。
- 3) これは音節末にある子音に制限があるからである。多賀 (2003) を参照されたい。
- 4) Ubaud (2011) はカタルーニャ語と同形を載せるが、Ubaud (2012) で修正をしている。

参考文献

- Ackema, Peter and Ad Neeleman (2010) "The role of syntax and morphology in compounding." In Sergio Scalise and Irene Vogel, eds. *Cross-Disciplinary Issues in Compounding*. No. 311 in *Current Issues in Linguistic Theory* John Benjamins. pp. 21–35.
- Botha, Rudolf P. (1984) *Morphological Mechanisms : lexicalist analyses of synthetic compounding*. Oxford: Pergamon Press.
- Giegerich, Heinz (2009) "Compounding and Lexicalism." In Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, eds. *The Oxford Handbook of Compounding*. Oxford University Press. pp. 178–200.
- Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Lafont, Robert (1983) *L'ortograa occitana: sos principis*. Reprint of the edition of 1971. Montpellier: Centre Régional de Documentation Pédagogique de Montpellier.
- Mistral, Frédéric (1932) *Le Trésor du Félibrige ou dictionnaire provençal-français*. Paris: Librairie Delagrave.
- Salvat, Josèp (1978) *Gramatica occitana*. 4th edition. Toulouse: Collège d'Occitanie.
- 多賀吉隆 (2003) 「オック語におけるコーダ条件による子音の半母音化」『ロマンス語研究』第36巻、67-75頁。
- 多賀吉隆 (2013) 「オック語における名詞形容詞複合語の分類」『津田塾大学紀要』第45号、169-182頁。
- 多賀吉隆 (2012) 「動詞・名詞複合語の形成に関するフランス語の音韻論的な制約」『ロマンス語研究』第45巻、研究ノート、75-80頁。
- Ubaud, Josiana (2011) *Diccionari ortogratic, gramatical e morfologic de l'occitan: segon los parlars*

lengadocians (109000 intradas). Canet: Editions Trabucaire.

Ubaud, Josiana (2012) “Fautas, cauquilhas, mancas e remarças divèrsas dins lo Diccioniari Ortografic.”.

<http://josiane.ubaud.pagesperso-orange.fr/Fautas%20Dicort.doc> (access: 2012-09-20).

“Wikipèdia: l’enciclopèdia lliure.” <http://ca.wikipedia.org>.

“Wikipèdia: l’enciclopèdia liura.” <http://oc.wikipedia.org>.